

びわこ丸 建造概要

旧試験調査船琵琶湖丸および旧放流船志賀丸は、いずれも船令10年を越えて船体の腐蝕が甚しいので、昭和35年度から旧両船の性能を兼備し、かつ、屯数は旧琵琶湖丸をあまり越えない程度の新船を建造する計画を進め、昭和36年度においてその建造を見たが、その概要は次のとおりである。

びわこ丸要目

起工	昭和36年5月25日
竣工	昭和36年8月8日
造船所	空兵衛造船所
建造費	2,329,000円
船種	漁業調査兼種苗放流船
様式	木造洋型
長さ	14M12
幅	3M24
深さ	1M28
主機関	ヤンマー3LD型 45PS
速力	8ノット

I 装 備 機 器 類

名 称	種 類	数 量	備 考
補 助 機 関	ヤンマー NT70K 型 4.5 PS	1 基	
発 電 機	日立 24V 600W	1 基	主機駆動
空 気 圧 縮 機	ヤンマー C3 型	1 基	補機駆動
活 魚 槽	島村商店 ナイロン・ターポリン 製	2 基	L2.0m×B1.0m×D1.3m=2.6 [㎥] 2 基
揚 水 ポ ン プ	日立 80 ^{mm} 渦巻式	1 基	補機駆動
徹 水 装 置		2 組	ポリエチレンパイプ製
排 水 装 置		4 基	同 上 サイフォン式 直排水
揚 網 用 ウ イ ン チ	小栗鉄工所 1 トン 捲	1 基	補機駆動
磁 気 羅 針 儀	布谷計器 卓上型	1 基	
魚 群 探 知 機	日本無線 231E 型 50KC	1 基	
電 気 水 温 計	村山電機 GMI 型	1 基	
手 動 捲 揚 機		2 基	観測用

II 主 要 改 善 箇 所

- (1) 活用槽は、船底に換水孔を設ける従来の方法を止めて、後部甲板に2[㎡]平方の開口部を設けて、甲板上に高さ50^{cm}の枠を取付け(甲板下80^{cm})これに上記2個の活魚槽を吊下げる方式を採用した。自然換水に代り機関室内に設置した渦巻ポンプで揚水して、徹水管から活魚槽へ瀑下させる。放流以外の用途に使用する場合、枠を外し、2^m×1^m×0.2^mの2箇の頑丈な蓋を開口部に施し、作業用甲板として使用出来るようにした。これによる利点として、
 - ア 従来最も腐蝕し易かった、活魚槽部の船体の腐朽を防止できる。
 - イ 停船中でも活魚槽に水を循環させることが出来るので、魚苗の収容力が旧船志賀丸より水槽容積がやや小さいにもかかわらず、逆に増加した。
 - ウ 活魚槽部を放流時以外は、作業甲板としても利用出来るようにしたため、屯数の増加を、最小限に止めることが出来た。
- (2) ひうお棲息状況調査に使用する角型幼生網の揚網は、従来人力で行っていたが、1屯捲の動力ウインチを据付けたので、作業能率が著しく向上した。
- (3) 操舵室、船員室の居住性をよくした。
- (4) 主機関の馬力数を旧両船の各30馬力から、45馬力に上げたので、速力が8節に増加した。

- (5) 空気圧縮機を設備したので、始動が容易となり船の安全性が向上した。
- (6) 船内配電設備を完備した。電圧調整器を備付けることにより、魚探機を船内電源により、運転出来るようにした。

